

宣証 - Sensyo -



いつも宣証の働きを祈り励ましてくださりありがとうございます。はやくも時は過ぎ、6月を迎えました。益々イベント等を通じて関わりが多くなりますから、宣証の働きは活発になります。被災された方の生き方に寄り添い、地域の建て上げに共に歩むことで、先導する竜生氏と主のミッションを成していきます。在主。

スタッフ一同

◆つながりが支援を充実させる（文責：中澤 竜生）

前回のニュースレターでは「そもそも」についてお話をしました。震災後からの地域支援ネット架け橋（以下「架け橋」という）の活動は地域にある自治会と協働する直接支援が主でした。現在の架け橋は社会福祉協議会（以下「社協」という）と連携し、活動を続けています。

【なぜ、連携するのか】

住民の状況を把握するためです。事例によると、復興住宅に入居された後、災害つながりの孤独死や自殺、経済破綻、家族崩壊などの問題が多く発生しました。

2011年に志津川高校避難所当時の責任者として勤められたY氏の紹介で、当時社協の会長をされていたS氏と話をしました。その時のS氏は、私がキリスト教の牧師であることをY氏から聞いていらっしゃいました。それで「もし、被災者の方で心が折れ、落ち込み、危険と判断される場合、どうぞ中澤さんがもっている心を提供してください」と話されました。今のS氏は南三陸町の副町長として大切な働きをされています。

それからの架け橋は連日のように避難所を訪れ、その後は仮設住宅地域48カ所を訪問し、各仮設住宅自治会との直接的やり取りを続けてきました。ですから意識して社協と

連携するということではなく、支援先で訪問される支援員と出会う中、お互いが知る現状をお話するという状況でした。

【震災があって発生した今の生活】

復興住宅に移り住んで一番早い人で3年が経ちました。そして訪問する中、あることが見えてきます。それは「扉が厚い」という言葉です。または「扉が重い」とも言います。

その言葉は仮設生活から比べると当然であり、ある意味ようやく普通の生活に戻った、いわゆるプライバシーが守られた瞬間です。震災前の生活に戻ったとも言えます。なぜなら、仮設生活では裏側に回るとガラス越しに中が見える状況でした。訪問する私は常に目を違う所に向けていることを思い出します。ですが復興住宅地では見えません。ベランダもしっかりしていますし、集合住宅では4階建てともなると、外からは1階であっても中の様子が窺えないのです。

しかしそれは、復興住宅に入居されたことで見守る体制をなくしたことも意味します。つまり支援員は、活動する多くの団体と連携する必要が出てきたのです。

【地方と都会では習慣が違う】

地方には都会とは違う日常があります。一見してそれが地方の人にとっては通常と思うのですが、例えば、戸締まりはしません。リビングの扉は大きく開いたまま、玄関からではなく、外から近い窓に来て喋り出すなど、これが受け継がれてきた環境であって日常的習慣なのです。それと、隣人との関係も深く、互いの生活を理解しています。それに親族には助け合う文化があって親身になって向き合います。そのため、以前は支援員は必要でありませんでした。

【震災から始まる外部からの影響】

震災後からは外からの影響や、様々な状況を知って様変わりしてきています。それが良い方向なのか、そうでないのかは分別のしようがありません。なぜなら今も復興への最中だからです。

自治会や、地域リーダーの方は今も私との関係を大切に思ってくださっています。しかし、このままでは良くないと思ったのは支援員との連携でした。支援員は復興住宅地域の集会所に派遣されており、平日は常に訪問も兼ねて活動をされています。実に南三陸町は大きな施設化となっています。このようなシステムは他で見えることはありません。私が住む愛子には支援員はいませんし、集会所に滞在していることもありません。皆様の地域はいかがでしょう？

仙台市桜ヶ丘という地域では、集会所に支援員さんはいませんが、生活協同組合（略称生協）施設の一部屋を利用し、支援員が自治会を通して戸別訪問をしています。あるいは相談を受けています。ちなみに、南三陸町社協が派遣している支援員は、介護福祉士の資格をもち多岐にわたる指導を行っています。その数は約150名います。

話を戻しますが、架け橋が連携は更に大切と感じたのは最近のことです。

【架け橋にできることの限界】

私たちは外部のもので、どんなに愛を表現しても近くにいるものではありません。ですが、支援員は近くにいます。架け橋が相談を受けます。そこには、二つの発信があります。

一つ目は、外部だから安心して言えることです。実はこれが一番多いことです。

二つ目は、自らが直面している相談です。この内容は既に身近な方に相談されていますが、多くの対処として解決できる行政、法律相談所、フードバンク、親族等に具体的な話を進めていくしか手立てがありません。当事者に寄り添いつつ、いかに穏やかに理解しやすく第三者に伝えるかです。そのような日常で架け橋が大切に関わる必要があるのは支援員であり、架け橋の相談も聞いてくださる専門の方々です。それで具体的な救済の窓口は大きく開くのです。



【支援員の限界】

社協として毎日訪問し続ける支援員は、住民の苦悩を親身になって聞きますが、悩みに対して望んでいる返答ができないことがしばしば起こります。それで当事者との溝ができることもあるようです。つまり社協には決まり事があることであってそれ以上はできません。それ以上のことは支援員ではなく、個人の対応となるのです。

社協では個人の判断による対応は認めてはいません。ここで支援員は自治会のリーダーに相談をします。解決がない場合は、支援を手伝ってくれる方を詮索し、自治会から要請されることもあれば、社協からの要請で外部支援に相談する場合があります。

そのようにして支援員と自治会との協働で解決を目指します。どの相談も個人、家族が日常を取り戻すための相談なのです。架け橋は、他の団体の一つとして協力してきました。

【ある支援員さんとの会話】

先日私たちはイベントのチラシを渡すために集会所へ行きました。平日には集会所で支援員が待機しているお話をしましたが、私たちが訪ねるとすぐに「上がってお茶でも飲んで行ってください」と何度も言ってくださいました。私たちはその言葉に甘えて少しゆっくりとした時間を過ごしました。とは言え、30分ぐらいですが。

次のイベント打ち合わせを念入りにし、その後は、自治会の今について話し、最後には、ある親子の問題を話されました。両親は80歳以上で息子さんは50歳以上です。支援員さんは、「以前は仮設住宅で裏手に行けば顔を合わせる機会があったのですが、今は4階建ての復興集合住宅でしばらく会っていない」とのことです。

どこにでもあることですが、特に年配者が多いこの町では、仕事場も少なく、閉じ籠もりは地域の問題ともなっています。これ以上立ち入ることができない家庭の問題に何らかの接点を持ちたいというのは、隣人を思う優しい心からでした。

【祈り心があって起こること】

よく思うことですが、先のように難しい出来事には覚えて祈ることをお勧めします。祈りは結ぶ、繋ぐことを起こすからです。何が出来るのかは会ってから考えるでも良いと思います。あるいは何かをしようというのでもなく、安否を問うのでも良いと思います。それらの前に祈り覚えることが全ての備えとなり、時に適った導きともなるです。

人の目に見えない魂には、見えない神様に祈り委ねることから始めます。早速の手段や方法よりも祈ることが一番だと心掛けてきました。そして出会うチャンスと、関われるチャンスが何度も訪れました。

今回お話して下さった支援員は、決して誰にでもこのようなお話をする方ではありませんが、話されたことによって私たちは祈りますので、きっと何らかの導きがあると信じています。それと、このような経験がクリスチャンの日常の証となると思います。

－ 活動報告 －

(1) 第8回 宮城三陸3.11東日本大震災追悼記念会が2019年3月9日は東松島市、3月11日は女川町にて開催されました。今年の参加者は2箇所です約300名以上でした。次年度は気仙沼市にて開催を予定しています。



広島福音教会牧師
加藤望氏と社協に訪問



後ろは天王山にある
復興集合住宅地

(2) 南三陸町 結の里施設に併設されている「えんがわカフェ」にて団欒の時間がもたれました。結の里は2018年2月に開所された、高齢者の介護や生活を支援する施設です。町社会福祉協議会が運営していて、ディサービスや生活相談の事業を実施しています。

(3) 5月10日は盛岡市において「ハートニットプロジェクトの解散式」が催されました。これは2011年から始まった就労支援で、寄付された毛糸で様々なものを作っています。作り手である「アミマー」と呼ばれる方々は被災者で、今では技術がどんどん洗練され、プロとして企業につながり、新たな展開が生まれています。この度、支援としての働きは一区切りとなりました。



南三陸町志津川の
アミマーの皆様



中澤の隣は協働している
明社理事の織笠氏

(4) 5月26日は落合市営住宅（復興集合住宅）にて今年7月末に開催される夏祭りに関する自治会会議が行われました。今回で4回目を迎える夏祭りは自治会ができる前から、仙台社協の依頼によるものであり、年中行事の一つです。お手伝いの目的は住民同士のコミュニティ支援と、行事にあたっては住民指導となる支援です。

－ 今後の活動予定 －

今年も6月にNPO法人シャロームが北海道から来られて、琴の演奏会を南三陸町と仙台市で開催いたします。震災当時から毎年覚えてこの地に慰問に来てくださっています。このような音楽を通じた働きもありますので、励ましのお祈りをお願いいたします。



◆会計報告

前回繰越金：173,225円

献金収入：788,769円（2019年2月26日－5月25日）

ご献金を捧げてくださった団体様および個人様（敬称省略 順不同）

基督聖協団上田教会、基督聖協団青梅教会、金原雅子、清瀬グレースチャペル、佐藤由紀夫、
基督聖協団相模原キリスト教会、基督聖協団信徒会、東北ヘルプ、川上直哉、基督聖協団中川教会、
基督聖協団西入間教会、基督聖協団八王子教会、広島福音教会、船堀グレースチャペル、
ハワイホノルルチャーチ、基督聖協団若潮教会、三俣雅通、三俣京子、向日かおり、
サンタ♡プロジェクト九州、勝田美也、基督聖協団目黒教会、仙台明るい社会づくり運動、松本のぞみ、
萱島キリスト教会、日本イエス・キリスト教団京都聖都教会、都筑コミュニティ教会、
新潟グレースネットチャペル、加藤望、八ヶ岳中央高原キリスト教会、大場孝子、基督聖協団練馬教会、
兵庫県立尼崎小田高等学校、復興支援超党派一致祈祷会（淀橋教会）、基督聖協団仙台宣教センター

献金支出：733,120円（2019年2月26日－5月25日）

車両交通費：158,120円、事務費・通信費：52,000円、啓蒙活動費：79,000円、

ネットワークサポート：10,000円、慶弔費：0円、年中行事費：0円、茶話会費：36,000円

被災者支援費：38,000円、雑費：10,000円、スタッフ費：350,000円（2名）

次回繰越金：228,874円

前回献金者名の記入漏れがありました。

伊藤歩様、清瀬グレースチャペル様、基督聖協団青梅教会様。

深くお詫び申し上げます。皆様の尊い献金に心から感謝を申し上げます。

－ お祈りのお願い －

この度は地域支援ネット架け橋のニュースレター「宣証」をお読みくださり、誠にありがとうございます。

地域支援ネット架け橋の活動の主体である「宣証」を継続するために献金を必要とします。

皆様にはこの活動費が満たされること、地域支援ネット懸け橋の支援の輪がより広がること、
現場において支援活動を継続する中澤竜生、佳子のためにお祈りくださいますようお願い申し上げます。

■銀行振込

【銀行名】七十七銀行 宮城町支店

【口座番号】普通 5497795

【名義】キリスト聖協団西仙台教会かけはし会計 中澤佳子

■郵便振替

【ゆうちょ銀行口座名義】地域支援ネット架け橋（チイキシエンネットカケハシ）

【店名】二二九店（ニニキュウ）（229）

【口座の記号・番号】02290-3-141031

【当座】0141031

■海外からのご支援

PayPal（ペイパル）を利用することでクレジットカードの使用が可能です。

【PayPal検索用アドレス】
yoshiko.n36@gmail.com



■地域支援ネット架け橋の活動内容はこちらのHPから→ <https://www.kakehashi2013.com>

■お問い合わせはこちらのメールアドレスへ→ kakehashi.net@gmail.com

【事務局】地域支援ネット架け橋

【電話】090-1069-3925

【活動スタッフ】中澤竜生、中澤佳子

【所在】宮城県仙台市青葉区愛子東3-14-22

【発行元】山形県天童市三日町二丁目6-14

【事務スタッフ】中澤義道、中澤愛美